

谷中佑輔(1988-)

谷中佑輔は彫刻家である。

彼の代表作は、彫刻にトマトを埋め込み、それを食べるという作品である。一見するとそこでは彫刻とパフォーマンスの融合が見られる。しかし事態はもっとラディカルである。アイデアを思いつき、制作を通して徐々にアイデアを具現化し、完成した彫刻を展示するという一連のプロセス全ては、ある意味でパフォーマンスそのものであるという事実。そこでの差異は関数としての鑑賞者だけである。彫刻であると同時にパフォーマンスでもあるという、永遠を願って残そうとする意志と、どうしても残ってしまう瞬間の痕跡の衝突が、そこにはある。谷中の実践は決して彫刻の拡張なのではなく、彫刻への真摯な、大らかな、愛に満ちた姿勢の具現化である。

本展において、谷中は新たにその真摯な姿勢を人体彫刻へと向けた。

極東の日本において、彫刻家はロダンを避けることができない。とりわけ、近代化の鬼子である人体彫刻は、その輸入と国産化の過程において、今もなおロダンという存在との距離から始めるほかない。戦後の抽象彫刻、もの派という切断を経て、人体彫刻をいかにアップデートするべきかという問いは、ともすれば、彫刻の更新であるはるか手前、すなわち「日本の人体彫刻」のアップデートにとどまってしまう。谷中はそのような複雑であると同時に瑣末なる「更新」を続ける日本の彫刻を、欧米のsculptureへと「アッサンブラージュ」という手法で接木してみせる。彼が目にしたのはバリー・フラナガンである。イギリス出身の彫刻家であるフラナガンは、キャリアの初期である60年代には「態度がかたちになるとき」展にも出展しているように一コンセプチュアルな側面を強く持った作品を発表していたが、その後、「うさぎ」の彫刻を数多く制作するようになる。日本においては80年代に「具象復活」「ポストモダン彫刻」の象徴として繰り返し『美術手帖』誌等に紹介されるようになるフラナガンであるが、彼の実践は、晩年のロダン自身が行ってきた制作手法—自身の作品の一部を再利用したアッサンブラージュの幾重にもねじれた換骨奪胎であった。谷中は、ロダンそのものの再解釈を迫るフラナガンの彫刻をさらに換骨奪胎することによって—そこにはブルース・ナウマンを始めとする数多くの人体彫刻の実践も織り込まれている—ロダンに縛られずに、ロダンから始まることを否定せず、そのまま同時代の彫刻へと展開してみせる。「アッサンブラージュ」とは、単なる素材の組み合わせの技法にとどまらず、複数の技法を、理念を、歴史を、そして何より作家の身体を再構成する身振りである。

ここで彼のパフォーマンスにも言及しておこう。谷中は、展覧会会期中1度、ローラーブレードに乗り、マイクを手にクリック音（舌打ち）を鳴らしながら、あらかじめ設置=展示されていた複数のパレットを横断していくパフォーマンスを行った。

パレットの上にはそれぞれ野菜や石膏を作るキットが用意されていて、彼は包丁で野菜を多面体にカットしたり、石膏で手の型を取ったり、そこにトマトを埋め込んだりといった行為を丸一日繰り返し続けた。

ここで重要なのは、谷中がローラーブレードに乗っているという点である。谷中の人体彫刻はすべて床にそのまま設置されており、逆にパフォーマンスの素材及び谷中は床に接していない(素材はパレットの上、谷中はローラーブレードの上)。この反転のうち、谷中はとりわけ異質な存在である。バランスをとりながらパレット間を行き来し、マイクに向かって音を出し、不定形なもの(=自然物)に幾何学的なかたち(=人工物)を与えては、動的な身体を石膏という静的な物体へと転換し続けていく。

いわゆるパフォーマンスにおいては、それが作家自身が行う場合であれ、作家の指示によって他者が行う場合であれ、彼ら人間も等しく作品 =彫刻化していくが、谷中のパフォーマンスにおいては、彼は彫刻家であり続けている。谷中はこれまでに述べたような幾つかの対立軸を行き来しながら彫刻自身へと還ろうとし続けるのだが(つまり彫刻家でもあり彫刻でもあるという状態に宙吊りになるよう企図するのだが)、その還るべき彫刻とは他ならぬ谷中自身であるがゆえに、彼は自身の身体へと引き戻される。彼の手から伸びるマイクのコードと、彫刻作品の一部であるロープが床で絡まりあう様は谷中が彫刻化しているようにも錯誤しうる状況ではあるが、コードとロープは結ばれているわけではないので簡単に解けてしまう。そして展示空間には、彼の行った行為だけが、彫刻化した一瞬の痕跡だけが残り続けるのである(ジュゼッペ・ペノーネが樹木に残した痛々しい手の型取りと指の痕跡を見よ)。そのような哀しみに満ちた谷中のパフォーマンスは、正しく「人体彫刻」という営みそのものであるといえまいか。そうしたパフォーマンスを挿入することによって、谷中はロダンよりもはるか以前にそのパースペクティブを引き直す。もう一度書こう。谷中は彫刻家である。彼の実践は、人類が連綿と行ってきた「自身の永遠化(の不可能性)」及び「自分であって自分でないものとの対面」という事態に対しての、真摯で、大らかで、愛に満ちた姿勢の具現化である。

補記：2回目となる展覧会においては、谷中はベルリンへと居を移すため不在である。彼は渡欧前に金沢にて滞在し、2回目の展示のための新作を制作した。